

滋賀の文化情報誌

デュエット

# Duet

2026 冬 vol.155

滋賀読書フェア

私の本づくりトークセッション

## 祖父たちの足跡を追って

私の出版体験

『本能寺の変 明智光秀冤罪説』

INFORMATION STATION

催し案内 2026 冬

MYBOOK

自費出版物の紹介

SUNRISE BOOK PRESS

サンライズ出版の新刊案内



トークセッション「祖父たちの足跡を追って」のようす。右から吉田与志也さん、松宮哲さん、野村赤一さん

2025年10月1日に開館した自費出版ライブラリー「考耕行」のオープニング企画として、10月18日に「祖父たちの足跡を追って」と題したトークセッションが、祖父を題材とした本の著者3名を登壇者にお招きして開催されました。

調査のきっかけ、原稿を仕上げるまでのご苦労と喜びなどについてお聞きしました。

本イベントは読書に親むことができるように滋賀県の図書館や書店が一緒に行う「滋賀まると読書フェア」（滋賀県教育委員会主催）のイベントとして開催されました。

### ■自費出版ライブラリー「考耕行」

住 所	近江八幡市浅小井町699（旧近江兄弟社小学校） ヴォーリスみらいビレッジ図書室
連絡先	携帯 090-1224-3246（岩根）
開館時間	10：00～17：00
開館日	開館カレンダーに準ずる （3ページの表とInstagram @koukoukou_books 参照）
入館料	無料（原則として予約が必要）
アクセス	無料駐車場あり／JR近江八幡駅よりタクシー約10分／JR安土駅・近江八幡駅より近江八幡市民バスあかこんバス安土北・金田コース

進行／岸田幸治 写真／辻村耕司





B  
C

**A** 第1部として行われた吉田与志也氏による講演「青年期のヴォーリスと共鳴者たちの軌跡」のようす。「考耕行」は、旧近江兄弟社小学校の図書室をリニューアルしており、壁にはW.M.ヴォーリス（8ページの注参照）とその妻で同校を創立した一柳満喜子の写真が飾られている

**B** 昭和期の小学校の雰囲気を残す自費出版ライブラリー「考耕行」入口

**C** 開催年別に受賞作と入選作が並ぶ棚

本誌4～9ページでは、第2部のトークセッションの3名の発言を各人単独の記事に編集しなおし、吉田氏の記事には、第1部の講演内容も盛り込んだ。

1月～3月の開館日

1月	16日(金)、17日(土)、30日(金)、31日(土)
2月	6日(金)、7日(土)、20日(金)、21日(土)
3月	6日(金)、7日(土)、27日(金)、28日(土)

3

あなたの本を応募しませんか

第29回 日本自費出版文化賞

募集期間 2025年12月1日～2026年3月31日

**応募資格** 制作費用の全額または一部を著者（個人・団体）が負担し、日本国内で2016年以降に出版され、主として日本語で書かれた一般書で、製本された著書が対象。

**募集部門** ①地域文化部門 ②個人誌部門  
③小説部門 ④エッセー部門 ⑤詩歌部門  
⑥研究・評論部門 ⑦グラフィック部門

**応募方法** 応募用紙に必要事項を明記のうえ、応募著書を1冊添えて文化賞事務局（下記）までお送りください。登録手数料：4000円

**申込先、応募著書・応募用紙送り先** 応募・登録はこちらから  
〒522-0004 滋賀県彦根市鳥居本町655-1  
サンライズ出版内 第29回日本自費出版文化賞係  
TEL 0749 (22) 0627 / FAX 0749 (23) 7720

**発表** 2026年9月上旬

**賞金・賞品** 大賞：賞状／賞金20万円  
部門賞：賞状／賞金5万円  
特別賞：賞状／記念品  
色川大吉賞：賞状／賞金10万円  
入選：賞状



自費出版ライブラリー「考耕行」に収蔵されている「日本自費出版文化賞」の応募作品について

平成10年（1998）に始まった「日本自費出版文化賞」は、NPO法人日本自費出版ネットワークの主管で年1回募集と選考が行われており、昨年度の第28回は9月に結果発表、11月8日にアルカディア市ヶ谷（東京都）で開催された「日本自費出版フェスティバル」において表彰式が行われた。

**第28回 日本自費出版文化賞 受賞作品** ※これらの受賞作品は全国各地の巡回展に用いられるため、「考耕行」に並ぶのは2027年4月以降となります。

- 大賞 該当作品なし
- 色川大吉賞 『私のことはわたしが決める—松本移住の夢をかなえたがん患者、77歳—』 竹内尚代（長野県）
- 地域文化部門賞 『紙で残す私の1枚』 『紙で残す私の1枚』 刊行委員会（長野県）
- 個人誌部門賞 『手記「もやいの海」』 菅原洋一（大阪府）
- 小説部門賞 『あたし、お地藏さんになれるかな？ 運がいいとか悪いとか』 東英文（東京都）
- エッセー部門賞 『実話 税務調査』 照伝光（大阪府）
- 詩歌部門賞 『句集 匙のうら』 森羽久衣（東京都）
- 研究・評論部門賞 『関東大震災・検見川事件』 島袋和幸（東京都）
- グラフィック部門賞 『大人の健康づくりと子育てのことをマンガにしてみた。』 かさね（神奈川県）



# 祖父の単なる一代記でなく、明治という時代全体を描いた小説にしたいと考えました。



のむらしづかず  
野村宗一さん

1936年、兵庫県川西市生まれ。  
1944年、滋賀県東近江市大沢町の  
実家へ転居。

## 祖父 野村宗のことを書いた 『明治の風』

(サンライズ出版、2009年刊)



定価2200円(税込)  
電子書籍1320円(税込)

明治維新の前年、東近江の片田舎に生まれた主人公を中心に、激動の時代に生きた人々の姿を描いた小説。

おじい様の経歴をご紹介ください。

**野村** 祖父は慶応3年(1867)生まれで、6歳のときに寺子屋に通い始め、2年後に小学校ができたので、3年生に編入しました。小学校を卒業すると、教員を養成する県立彦根伝習学校に入学します。試験に合格し、明治13年(1880)、13歳で準訓導という小学校の先生になりました。当時は小学校でも落第があったので、初めて小学校の先生になったときには、自分より年長の生徒もいたそうです。

小学校の先生を4年ほどして、もっと勉強がしたいと、東京専門学校(現、早稲田大学)の予科(2年制)へ入ります。ところが、予科が終わる年に父親が病気になるので本科へ進まず、帰ってきて連合戸長役場へ就職します。

ちょうど明治20年(1887)に、東京専門学校が日本で初めて3年制の通信教育を始めました。役場に勤めながら、通信の勉強も続け、明治22年に町村制ができる、地元のむらしづかずの東押立村役場の職員になります。23歳のときに結婚するのですが、その奥さんが2年後に結核で亡くなってしまいま

す。明治28年(1895)に日清戦争が終わって、台湾が日本に帰属すると、祖父は台湾へ渡りました。

当時、台湾には原住民族がいっぱいおり日本人もかなり殺されています。そんな時代でしたが、台湾の現地語の勉強を1年間行つて帰順するよう説得するときの通訳になりました。非常に戦闘的とされた民族の頭を説得した功績を認められて台湾総督府に採用され、民政局の主計課へ配属されます。当時の後藤新平民政長官、中村是公といった方の下で働きました。

ちょうど新渡戸稲造が台湾へ招かれて農業振興に尽力した時期です。道路、鉄道、病院、学校などをつくり、熱病などがはやっていたので、衛生状態を改善するために東京よりも先に下水道もつくりました。

その後、祖父は私の祖母と再婚するのですが、日露戦争が終わると、旅順とともに日本の領土になった大連の民政署へ転勤しました。翌年に関東州を統治する関東都督府の民政部となります。日本が南満州鉄道沿線の開発を進めたところで、それに関わる



台湾にて  
1900年頃撮影、左から2人目が野村宗

- ※1 後藤新平(1857~1929) 政治家。満鉄初代総裁として植民地経営に活躍。通信・内務・外務各大臣、東京市長などを歴任。
- ※2 中村是公(1867~1927) 官僚・政治家。南満州鉄道総裁、貴族院議員などを歴任。夏目漱石の親友としても知られる。
- ※3 松岡洋右(1880~1946) 外交官・政治家。国際連盟脱退時の首席全権。近衛内閣外相として日独伊三国同盟締結。
- ※4 星一(1873~1951) 実業家、政治家。星製薬の創業者、星薬科大学の創立者。「東洋の製薬王」と呼ばれた。長男はSF作家の星新一。

調査などに従事します。そのときに台湾でも上司であった後藤新平が満鉄総裁となりました。松岡洋右とは同じ課長同士で、なかよくさせていただいたと聞いています。

大正時代に入ると、台湾時代に知り合った親友であった星製薬の星一社長に請われて、役所を辞め、大連で星製薬の満州総代理店を開業しました。その地でいろいろな役職も務めながら、昭和5年(1930)に亡くなりました。ちょうど世界恐慌の翌年で日本も大不況の時代です。商売の方は整理して、家族は帰国しました。

調べるきっかけは何だったのですか。  
**野村** 私が中学1年のときに亡くなった祖母は、台湾時代からずっと苦勞をともし

## 祖父たちの足跡を追って

てきた人だったので、小さいときから、祖父に関する話をくり返し聞かされていたんです。それで、いつかはそれを本にしたいなと思っていました。また、母は祖父の一人娘なので、知っていることを、なんでもいからノートに書いてくれと頼みました。ですから、この本は祖母から聞いた話と母のノートがもとになっています。

よかったのは、祖母が蔵に、祖父が台湾で採用になったときから退職するまでの採用、昇給、昇格、転勤、出張の辞令といった書類を全部残しておいたことです。これが非常に役に立ちました。

——『明治の風』には、歴史上の出来事や著名人がたくさん出てきますね。

**野村** 会社を定年退職して、いよいよ祖父のことを書くころと思ったときに、祖父の単なる一代記でなく、祖父を主人公にして明治という時代全体を描いた小説にしたいと考えました。

私は明治という時代にとっても興味があったのですが、時代小説の舞台は主に江戸時代で、現代小説は昭和以降のことが中心と、明治・大正を書いた小説は少ないんです。司馬遼太郎の『坂の上の雲』でも書き出し部分を読むと、明治という時代を書きたいと書き始められたようですが、進むうちに、日露戦争そのもの話になってしまっただけで、当時の庶民の姿などは、ほとんど出てきません。そうした点に不満がありました。

例えば、祖父が野口英世と星製菓の本社で出会ったというのは事実です。ただ、小説なので、野口英世とその母の京都観光の案内をしたというのは創作です。小説ですからふくらまさないとおもしろくないので。ただ、創作ではない劇的な場面もあります。伊藤博文がハルビンで暗殺される大事件が起こったとき、都督府長官がちょうど

東京へ出張しており、祖父が大事件の事後処理をする責任者の一人になったんです。旅順に鉄道で運ばれてきた遺体を納棺し、腐敗しないよう処理して、軍艦で日本に送り返すまでの実務を担当しました。

そのため、祖父から「納棺する時の経帷子をすぐ縫え」と言われて、「一晩かけて大きな経帷子を縫わせてもらった」と祖母はよく言っていました。

——資料探しの苦労などはありましたか。

**野村** この本の次に井伊直弼を中心に書いた幕末小説『雪辱』（第20回日本自費出版文化賞入選）でもそうでしたが、歴史小説は歴史的な事実をしっかりと押さえたうえで、フィクションの部分でふくらませることが大切だと思っています。ですから、『明治の風』執筆にあたっては、数十冊の文献資料を調べて、ノートをつくっていききました。

小説の文章には臨場感が大切だと思うので、現地の取材も必ずします。台湾へは台北を中心に西側、東側に分けて2回行きました。現地の地形や、どんな花が咲いているかといった風土を目で見て、なるべく詳細にメモして参考にしました。

大連と旅順にも行きました。JTBにお願いして、現地ガイドを紹介していただいたら、北京大学の日本語学科を出た非常に優秀な女性で、司馬遼太郎の『坂の上の雲』を日本語でお読みになったというので、びっくりしました。

『坂の上の雲』では乃木大将のことを悪く書いてあります。そのガイドさんは、「あれは司馬さんがおかしい」と言うんです。旅順の要塞を攻撃する前、乃木さんに情報を与えずに「行け」と命令した方が悪いと。もっと情報を集めてから攻撃すべきで、「乃木さんが悪いわけではありませんね」と言うんです。私もそう思った。そのぐらいの

※5 児玉源太郎（1852～1906）軍人。台湾総督・陸相・内相などを歴任、日露戦争時は満州軍総参謀長、のち参謀総長。人がガイドをしてくれたので、非常に助かりました。

——予想外の発見などはありましたか。

**野村** 予想外ではなく、改めて知ったことですが、台湾を取材した20年近く前ですと、私より年上の人は、日本語を流暢に話されるのでたくさんの人と話しました。

皆さん一様に、台湾がいまみたいに発展しているのは日本が統治をしていたころがベースになっているとおっしゃる。児玉源太郎や後藤新平といった名前もご存知で、彼らが道路や学校、病院をつくってくれたおかげなんです。祖父は台湾で苦労しただろうと思いますが、いま台湾が非常に親日的であるのは、明治30年代の日本人の努力が実っているのだなと改めて知りました。

——明治、大正という時代について、どういった印象を持たれるようになりましたか。

**野村** 明治政府は、武力で徳川幕府を倒すことを目的とした薩摩と長州が中心になってしまったので、江戸時代の優れた文化をほとんど否定していった面があります。ただ、実際の明治に生きた人たちは、江戸時代の多彩な精神文化を引き継いできたというところを、私は明治という時代を調べる中で強く感じました。

『明治の風』に登場させた偉人から、祖父や祖母が交わった多くの人たちまで、おしなべて言えるのは、西洋と肩を並べる優れた国にしようという強い意志を持って生きてこられたということです。

非常に厳しかった祖母も、やっばりすばらしい時代の人たちだったなと感じます。その血は大正、昭和にも、現在のわれわれにも流れているんだと思います。

# カナダの日本語新聞『大陸日報』を見てみると、毎日毎日、発見の連続でした。



まつみやま ざとし  
松宮 哲さん

1947年、滋賀県彦根市生まれ。

祖父 松宮外次郎のことを書いた  
『松宮商店とバンクーバー  
朝日軍—カナダ移民の足跡—』  
(2017年刊)



非売品

明治時代、滋賀県の湖東地域からカナダに移り住んだ人々の暮らしぶりや、野球チーム・朝日軍の活動を詳細にたどる。第20回日本自費出版文化賞入選。



松宮商店食料品部

1910年頃、右から4人目が松宮外次郎

—おじい様の経歴をご紹介ください。

**松宮** 私の祖父の松宮外次郎は、明治5年（1872）、犬上郡開出今村（現、彦根市）に生まれ、8歳のときに父親が35歳で急死したため、丁稚奉公に行きました。23歳になって故郷に帰ってくると、カナダに渡ることを決意し、明治28年（1895）にカナダへ渡りました。

最初はバンクーバーを流れるフレージャー川の河口近くにある町に行つて、産卵のために上がってくるサケを捕まえて缶詰工場に売る仕事につきました。サケを捕って持つていくと、すでに大漁すぎてもう受け取らないと断れ、次は内陸部で金が出ると聞き、掘りに行きました。ゴールドラッシュは過ぎ去っていましたが、3年間、脇目も振らずに働いた稼ぎを手に帰国しました。

呉服を扱う松宮商店を創業したのですが、当時の日本は掛け売り商売で年に2回、お盆と大晦日に集金する形だったことに不満を持つたようです。現金商売が普通のカナダの方がいいと、再度カナダに渡航します。その時に持っていった味噌や米、醤油を現地の日本人に分けたら、非常に喜ばれた

ので、いったん帰国し、京都・大阪・神戸などの商店を回つて特約店となる契約を結び、安く仕入れた商品をカナダで販売する松宮商店をバンクーバーに開業しました。当時、日本人移民がどんどん増えていたので、店は発展しました。

ただ、1907年にはバンクーバー暴動が起こります。ある検事総長が議会に「今に5万人の日本人がやってくる」と大袈裟な報告をしたことをきっかけに、不安を感じた白人が日本人街に石を投げてガラスを割るなどの破壊行為をした事件です。松宮商店も被害を受けました。当時、バンクーバーには約2万人の日本人がいて、滋賀県人が最多、次が和歌山県、以下、広島、熊本と続く感じでした。滋賀県からは、犬上郡あるいは愛知郡、坂田郡の米原など、ほとんど湖東地域からの渡航でした。

外次郎は、日本で教育を受けさせていた息子の増雄（私の父）が昭和3年（1928）に彦根高等商業学校（現、滋賀大学経済学部）を卒業したので、カナダに呼び寄せて松宮商店を継がせ、自身は帰国しました。やがて太平洋戦争が始まり、日系の日本

人は敵性外国人と見なされ、財産はすべて没収されたうえ、収容所に送られました。終戦後、カナダに忠誠を誓う者はカナダ東部に移れば定住を許可されましたが、両親は日本に帰ることを選びました。その後、父と祖父と一緒に暮らして、祖父は昭和32年（1957）に85歳で亡くなりました。

—カナダ移民の要因となった水害についてもご説明いただけますか。

**松宮** 明治時代には、琵琶湖周辺の村々や田畑が浸水する水害が滋賀県では何度も起こっていました。祖父がカナダに渡つた年の翌年にあたる明治29年（1896）9月の大水害は、琵琶湖水位プラス3・76mという最高水位を記録しました。梅雨の長雨の後に、ひと夏で3回も台風が来たそうです。浸水日数は237日におよび、これでは米もできないといっているので、カナダへの移民が増えました。

—調べるきっかけは何だったのですか。

**松宮** 平成26年（2014）に『バンクーバーの朝日』（石井裕也監督、東宝）という映画が公開されました。この映画を紹介するテレビ番組を見て、「バンクーバー朝日」という名前は聞いたことあるなと思い、



スタンレーパークにて  
(上) 1920年頃、右端が松宮外次郎、隣が妻やを  
(下) 2025年9月15日、同じ木の下に立つ松宮さん



父の増雄が書いた『開出今物語』(1984年、私家版)を読み直すと、祖父はバンクーバーの野球チーム・朝日の会長をやっていたと書かれていたんです。映画の公開が始まると、飛んで観に行ったのですが、映画の中には、滋賀県のことはいっさい出てきませんでした。

それが非常に残念だったものですが、自分で調べ始めたんです。すると、バンクーバー朝日の初代の監督、ピッチャー、キャッチャー、みんな開出今村の出身だったんです。シヨート、ライトも現在の彦根市出身で。こうした発見もあったので、祖父のことだけでなく、バンクーバー朝日のことをできるかぎり調べることにしました。

——今年(2025)の9月にカナダへ行かれたそうですね。

松宮 実は昨年(2024)の9月に行く予定だったのですが、ちょうどコロナにかかってしまい、肺炎で入院までしたもので。次のチャンスを狙っていたところ、今年9月1日〜21日に滋賀大学の学生を対象とした「カナダ・スタディ・ツアー」という英語学習研修ツアーがあることを知りました。3週間のうち初めの2週間は語学研修、残り1週間のフィールドワークに日本人街の見学なども含まれているというので、後半

の1週間だけ参加させてもらえないかと頼んだところ、OKしていただき、学生さんたちと一緒に回らせていただきました。

松宮商店のあったパウエル街は、残念ながら現在はいわゆるスラム街になっており、個人旅行だったら近づかないように言われるような場所だったのですが、学生たちが一緒に歩いてきてくれたので行くことができました。

一番行きたかったのは、バンクーバーのスタンレーパークという公園にある「ポロツリー」と呼ばれて観光名所にもなっている巨木です。この木は400年前から同じような状態だそうで、家に写真が5枚ぐらいあったので、ずっと行きたいと思っていたものです。喜びのあまり、万歳して写真(左上)を撮りました。

——資料探しの苦労などはありましたか。

松宮 私の場合は、家にあった資料はわずかでしたので、まず当時の資料を探しました。すると、カナダで発行された『大陸日報』という日本語新聞があると知りました。彦根市立図書館にもマイクロフィルムで保存されていますが、閲覧する機械が使えないと言われて、さらに調べたら、大津市の県立図書館にもあって閲覧する機械も使えるというので、毎週土日、朝一番から閉館時刻までずっと閲覧して、必要なところをコピーして持ち帰り、使えそうな部分をチェックする作業を続けました。

もう一つ、私には助っ人ができました。和歌山県出身の朝日の選手のお親戚にあたる方が東京におられて、同じように調査されており、この方は英語も堪能で、カナダ日系博物館を紹介していただいたので、たくさんアーカイブを取り寄せることができました。今回カナダに行ったとき、同館にはお礼にうかがい、その後もいろんなこと

※1 『大陸日報』カナダ・バンクーバーで発行されていた日本語新聞。1907年に創刊、1941年まで発行。

を教えてくださいました。  
——調べる中で予想外の発見などはありましたか。

松宮 『大陸日報』を見てみると、毎日毎日発見の連続でした。見れば、また違う新しい疑問が湧き、その何日か後に見ると、また違った発見がありというふうで。

当時、松宮商店はこの新聞に毎日、広告を出していたので、松宮商店で売っていたいろいろな商品がすべてわかりました。松宮商店以外の店も商品の種類とともに、住所、経営者名などを調べていくと、現在の彦根市にあたる範囲の出身者がたくさん商店を経営されていたとわかりました。

記事には、亡くなった方の紹介があったり、いろんな事件も書いてあるので、当時の生活がつぶさにわかりました。

——明治、大正という時代について、どういった印象を持たれるようになりましたか。

松宮 カナダに当時、滋賀県人が4000人ぐらいは渡っています。英語もほとんど知らないまま行っていて、日本人街を築いて生活したのですから、フロンティア精神がすごくあったんじゃないかと思っています。

『大陸日報』に書いてある文章も、非常に核心をついたようなものがたくさんあります。しっかりした考え方の人がたくさんおられたことがわかります。野球の試合では、審判の判定で揉め事も起こるのですが、日本人選手は毅然とした態度でフェアプレーに徹し、白人の観客が日本人チームのプレーが正しいという審判をなじるといった記録もあって、当時の日本人は偉大だった、いまよりもっと精神的に強かったように感じました。

最初は断片でしかなかったものが少しずつつながって、うれしくなってくるんですよ。



よしだ よしや  
吉田与志也さん

1954年、滋賀県近江八幡市生まれ。

祖父 吉田悦蔵のこゝろを書いた  
『信仰と建築の冒険  
—ヴォーリスと共鳴者たちの軌跡—』  
(サンライズ出版、2019年刊)



定価3080円(税込)

W・M・ヴォーリスの生涯のパートナーだった吉田悦蔵が遺した資料から、近江ミッションの草創期から発展期の活動・交流を解明。第33回地方出版文化功労賞受賞。

おじい様の経歴をご紹介ください。

吉田 祖父の悦蔵は、明治23年(1890)に神戸の油商に生まれました。工業用や家庭の行灯用に魚油を売る老舗だったので、継ぐにあたって「これからは石油の時代だから英語を勉強せよ」と言われて、明治36年(1903)、わずか14歳ぐらいで近江八幡の県立商業学校(現、八幡商業高校)に入学し、八幡小学校のすぐそばで下宿したそうです。当時の八幡商業学校は商人の士官学校のような扱いで、家族の期待を受けて入学してきていました。

そこへ英語の先生としてやって来たのがウィリアム・メレル・ヴォーリス<sup>※1</sup>で、ひげもじやの先生の中に若くてハンサムな先生が現れて、日本語もできないのに親しく接してくるので人気を集めます。ヴォーリスがキリスト教伝道のため、YMCAのような活動を始めると生徒がどんどんやってきて家がたまり場になっていくわけです。

あまりにも信仰の感化力が強くて、1年で16人が洗礼を受けたというのは、異常事態でした。当時、東京へ来た宣教師でも信者をつくり洗礼に導くには何年もかかるの

が普通でしたので。

反発を受けて解任されてしまったヴォーリスは、YMCA会館(現、アンドリュース記念館)を建てたばかりだったので、ここを根城に伝道を始め、生徒の一人だった悦蔵と一緒に生活するようになります。しかし、悦蔵は家業を継ぐという期待を受けていたので、1年間手伝った後、いったん神戸に戻って三井物産に就職しました。

そこへもヴォーリスがたびたびやって来て誘ったので、結局、悦蔵は家業を継がずにヴォーリスの伝道と建築設計を助けることを決意し、明治44年(1911)、近江ミッションの設立メンバーとなります。前年に活動資金を得るために設立した建築設計事務所(ヴォーリス合名会社)では、建築材料・家庭薬・楽器などの輸入販売も行いました。社会事業としては、結核療養所の開院や女子中等教育にも手腕を発揮しました。生涯にわたってヴォーリスの右腕として

働き、昭和15年(1940)に近江兄弟社の理事長となりますが、翌年始まった太平洋戦争のさなかの昭和17年に亡くなりました。調べるきっかけは何だったのですか。



伝道団・近江ミッションのメンバー  
(1912年1月撮影)。ヴォーリス(右端)、吉田悦蔵(右から4人目)、悦蔵の母の柳子(着座)

※1 W・M・ヴォーリス(1880~1964) 建築家、社会事業家、近江兄弟社創立者。1919年、「柳満喜子」と結婚。1941年、日本国籍を取得し、「柳米来留」と名のる。

吉田 私が60歳手前の頃、実家である吉田悦蔵邸を維持しなければならなくなりました。国の登録有形文化財だったので由來書を書き出していたら、ちょうど県の担当課から、「県の指定有形文化財を受けませんか」という連絡をいただいたんです。つきり、県より国のほうが手厚いとばかり思っていたのですが、「指定」が付くと、県が本気になって保護しますとのことでした。

同じころ、ヴォーリス建築文化全国ネットワークという、全国のヴォーリス建築に関する活動をしている団体や愛好者を束ねる組織から、全国大会へ参加のお誘いを受けました。参加してみたところ、皆さん、祖父のことにお詳しく、これは自分も勉強をしないとイケないなと思ったわけです。

それで、吉田邸の3階に眠っていた書類や書簡を出してきて少しずつ読み始めたのですが、内容がばらばらで、年代がわからない写真がいっぱいある状態でした。そこ



近江ミッション住宅3棟

(1914年秋頃撮影) 吉田悦蔵が23歳の時建てた自宅(手前)、ウォーターハウス邸(中央)、ヴォーリス邸(右端奥)。ヴォーリス邸以外は現存

で、まず資料や写真をスキャナーで取り込んで、年代を調べて索引をつけていきました。いまはパソコンという便利なものがあるので、できたことです。

自分の家の資料以外も調べるようになる、最初は断片でしかなかったものが少しずつつながってくるので、うれしくなってくるんですよ。いつのものがわからなかった写真が、突然ある出来事とつながったりするんです。それが楽しくてしかたがない不思議な時期がありました。

——調べる中で予想外の発見などはありましたか。

**吉田** 近江八幡に吉田邸を建てたのは、悦蔵が23歳のときで、まだ独身でした。そのことがずっと私には引つかかっていたのですが、理由がわかったときに一番驚きました。

ある時期の手紙を読んでいると、何度も出てくる女性の名前があったんです。「キクさん」と書かれていて、ヴォーリスの手紙にも「このごろキクさんのことを言わないじゃないか」と書いてあり、ガールフレンドらしいなと思ってあたっていくと、一枚の手紙にだけ、名字が書かれていました。そこから東京の石原キクという女性と婚

約をしていたということがわかりました。彼女が半世紀近く園長を務めた東京の幼稚園と保育士養成学校はいまもあるとわかり、連絡を取って訪れると、男性の学園長さんが出てこられて、「吉田悦蔵さんのお孫さんじゃないですか」と言われて、びっくり返りそうになりました。あちらも、事情を知っておられたんです。

写真などを見せていただき、非常に立派な方だとわかりました。東京のバプテスマンミッションから派遣されてシンシナティ大学で幼児教育を学び、日本へ戻ると保育士養成学校の教頭になりました。留学までさせたバプテスマンミッションとしては、近江八幡に行かれては困るということで、綱引きがあつたんです。結局、彼女なしでは日本での幼稚園事業は頓挫するとまで言われて別れることになりました。キクさんは再びアメリカに留学して、帰国後は幼児教育界の重鎮になっていきました。

結局、祖父はキクさんと結婚できず、後に私の祖母、清野と結婚します。婚約がうまくいっていたら、私はいなかったのだなと考えると、ちよつとぞわぞわとします。

また、書くにふさわしい事実かどうかもわかりませんでした。そこで、ある人に相談してみたら、書いておいた方がいいとアドバイスいただきました。婚約破棄の理由が、どちらかに落ち度があつたわけでもなく、いまでも、あちらの幼稚園では創立者として名前を伝えておられる方なので。

——資料探しのご苦労はありましたか。

**吉田** 最初は実家にあつた資料でかなりやれましたし、悦蔵が亡くなってすぐに出た沖野岩三郎編『吉田悦蔵伝』はヴォーリスが最終チェックしたそうなので、信頼度が高いと考え、それを中心に事実を積み重ねていきました。あとは、やはり国立国会図

※2 石原キク(1884〜1967) 児童教育者。東京保母婦伝習所長兼付属彰栄幼稚園長、基督教保育連盟関東支部会長などを歴任。1912年創刊、現在も発行継続。

※3 『湖畔の声』 近江兄弟社発行の月刊誌。1912年創刊、現在も発行継続。

なぜ神奈川大学の所蔵になったかということ、吉田邸を調査なさった神奈川大学の建築史の先生(故人)が「この資料は保存すべきだ」と強く言われて、大学図書館の所蔵になったそうです。ありがたいことなのですが、それを孫が写しに来るとは、誰も思っていなかったんです。

——明治、大正という時代について、どういった印象を持たれるようになりましたか。

**吉田** 明治、大正という時代において宣教師の役割は、非常に大きかったと感じています。日本人はそれほど信仰に飢えていたわけではないのですが、宣教師が持ち込んだ西洋文化に直接触れさせてくれる人という意味では、ものすごく社会に活力を与えて、日本の近代化の役に立ったといえます。宣教師たちは1000人を超える数だったはずですが、それが戦争で一斉に追い返されてしまいます。それまで師と仰いでいた人たちが、突然消えて半世紀ほど積み重ねられてきた歴史が途絶えました。

——ヴォーリスは数少ない例外ですからね。

この戦争による変化というのは非常に大きく、実際に宣教師が何を残してくれたかという記録も、ほとんどなくなっています。戦争が文化的な面でもかなりのものを破壊してしまっていたと、調査しながら身に染みしました。

## 『本能寺の変 明智光秀冤罪説』

本能寺姉弟 三寺絵梨子 池田修平（兵庫県在住）

## 18年間の研究成果を一冊に

本能寺の変で織田信長を討つたのは明智光秀ではないと説く書籍を姉弟でまとめた。

姉の三寺絵梨子さんはふだん占い師として活動、弟の池田修平さんは理系技術者として勤務するかわら、ともに研究とフィールドワークを18年重ねてきた。

これまで謀反の理由は数多く挙げられてきたが真相は不明。なのに、なぜ「光秀はやっていない」可能性を検討しないのか。そんな思いから研究を始めたという。

## 古文書の原文と現代語訳を併記

冤罪を立証する試みとして「正しい天下の取り方がある」など六つの証拠を挙げ、古文書を示しつつ分かりやすく解説。当初は現代語訳のみ載せていたが、編集担当の提言で原文も追加した。引用法や出典表記など正確を期し、説得力を増す結果につながった。

校正について三寺さんは「自分たちでは見落としていたこと、知

らなかつた視点や知識を学ぶことができました」と感嘆する。

## 450年も大きな誤解を覆す

また、三寺さんは「史料を精査し、通説とは異なる視点から事件の経緯を再検証しました」とも語り、池田さんは「約450年も大きな誤解が続いてきました。真犯人は誰なのか、一読して納得いただければ」と続ける。

琵琶湖畔の取材には県内企業に勤める末弟の池田玲さんが同行したこともあり、玲さんが撮影した湖の写真を使ったりしおりを作成。イベント販売時などに配る記念品として利用している。

2026年は「豊臣兄弟！」と「本能寺姉弟」がブレイクする年になりそうだ。

滋賀県庁で記者会見。右から、執筆した池田修平さんと三寺絵梨子さん、琵琶湖の写真を持つ末弟の池田玲さん



## プロフィール

## ▼本能寺姉弟

姉（三寺絵梨子）が考証と分析を担当し、弟（池田修平）が史料の読解を担う。姉は講師としても活動しており、論理的な分析と表現力で歴史の本質を伝える。著書に『天切り本能寺の変』『たぶん、光秀はやっていないのだ放浪記 天切り本能寺の変へ続く道』（ともにハレード、2021年）。



公式サイト

## ▼三寺絵梨子

1982年、兵庫県生まれ。神戸女学院大学卒。占い師「じえぶ」として活動し、イラストレーターとしても活躍。著書に『27星座 宿曜占星術（魔女の家BOOKS、2015年）』『もしも彼女がシャム女なら』（ペンコム、2017年）。



公式サイト

## ▼池田修平

1985年、兵庫県生まれ。神戸大学大学院卒。株式会社ノリツ勤務。理系技術者。



明智光秀の無罪を立証する試み。  
1,980円（税込）



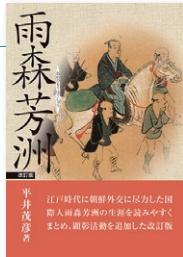
## 第六句集 婆婆羅句集

佐々木国広 著  
A5判並製本 総90頁 頒価1000円

**問合先** 東近江市五個荘瀬瀬町413 (著者)  
第五句集『晴嵐』刊行から7年、ある句会への参加と、主宰者の句集にふれたことから、「再び俳魔が私にとりつき」心機一転。写生句のほか戯句、雑句の類も収載。(2025.9.30刊)

## 雨森芳洲 [改訂版]

平井茂彦 著  
B6判並製本 総214頁 頒価1000円  
**問合先** 長浜市高月町雨森1587 (著者)  
雨森芳洲庵初代館長だった著者が2004年初版の本に「芳洲先生の顕彰活動」の章を追加した改訂版。朝鮮外交に活躍した雨森芳洲の生涯と晩年の著作や和歌を紹介。(2025.11刊)



## 三度目の翼

てつがく かあし  
綴学家 葦 著  
四六判並製本 総376頁 非売品

**問合先** asi.3.tsubasa@gmail.com (著者)  
子どもを救う教師になりたいと夢見る月下雪穂は、ある元小学校教員に出会い、「綴学家」という資格を取る。そして……。心の奥深くに潜む「内なる子ども」が癒されていく物語。(2025.10.25刊)

## 黄泉はマーガレットだった

関榮士郎 著  
B6判並製本 総108頁 頒価1000円  
**問合先** 京都府京田辺市新茶屋前10-7 (著者)  
詩的言語として具現化できるなら／マーガレットよ／永遠に咲き誇れ——社会福祉法人に勤めながら、「近江詩人会」に所属していたこともある著者の詩集。(2025.11.16刊)



## 滋賀読書フェア

### ミシガンクルーズ 開催!

滋賀県教育委員会の主催で、2025年8月から12月にかけて県内の図書館と書店の協力のもと行われた「滋賀まるごと読書フェア」の最終イベント「ミシガンクルーズ」が、12月25日(木)に開催されました。

当日はあいにくの小雨でしたが、大津港に接岸した琵琶湖汽船のミシガンに抽選で選ばれた「滋賀コレかるた大会」参加の児童・保護者と「宮島未奈さんトークイベント」参加者が乗船し、琵琶湖南湖を周遊しながら両イベントと絵本の読み聞かせ、「しがどうわ」紙芝居、リユース絵本プレゼントなどの催しを楽しみました。



## 企画展 祈り、捧ぐ、つなぐ —川道のオコナイを中心に—

2月14日(土)～3月29日(日)  
長浜城歴史博物館



川道のオコナイのよ  
うす

「オコナイ」は、五穀豊穰などを祈願する伝統行事です。湖北地域で盛んに行われ、の中で最大規模のものが、「川道のオコナイ」です。令和3年(2021)以降、自治会が主体となった改革が実施され、それまで認めてこなかった女性参加を解禁するなど、内容を大きく変更しました。本展では、改革前の行事の姿を記録し、使用されていた道具等を通じてかつての行事のようすを紹介します。

あわせて、令和7年に実施した長浜市域のオコナイ行事の現状に関するアンケート調査の結果についても紹介します。

**入館料**：大人500円、小・中学生200円  
**休館日**：月曜日(ただし、2月23日(月・祝)は開館し、24日(火)休館)

お問い合わせ先：TEL 0749 (63) 4611

## 栗東歴史民俗博物館開館35周年記念特集展示

### 栗東の仏教美術 —旧山口寺と金勝谷の宗教文化—

開催中～2月23日(月・祝)  
栗東歴史民俗博物館

開館35年という節目を迎え、あらためて栗東の仏教美術を紹介するとともに、開館初期の調査・研究活動を通して修理・復元された旧山口寺の諸仏によって当館の活動の記録も紹介する機会とします。  
**入館料**：無料  
**休館日**：月曜日、2月12日(休)



重要文化財(山口寺旧蔵)  
地蔵菩薩坐像(金勝寺)

### ■ 展覧会記念講演会

「みんなで守る文化財—地域の核としての博物館」

2月14日(土) 14:00～15:30

**講師**：大河内智之氏(奈良大学文学部教授)  
**会場**：栗東歴史民俗博物館 研修室  
**参加費**：無料  
**定員**：80名(当日先着順)  
お問い合わせ先：TEL 077 (554) 2733



## 近江学 第17号

成安造形大学附属近江学研究所 編  
A B判並製本 総96頁 1980円（税込）

特集テーマは「講 つながりのコミュニティ」。  
大津市歴史博物館への依頼からうかがえる講資料の散逸の危機、郡内世帯の9割近くが加入し罹災・救済事業を担った伊香相救社など、さまざまな事例の背景と課題を考察。

## ふなずしと琵琶湖の女たち

弟子吉治郎 著  
四六判上製本 総200頁 1980円（税込）

伝統料理ふなずしをめぐる小説ついに登場！  
ふなずし名人と呼ばれるヒロイン比呂絵や、その友人で色気たっぷりのシゲちゃん、漁協組合長の孫娘・奈津子、琵琶湖の沖島の元気なおばちゃんたちなど、魅力的な女性たちが大活躍。



## 詩集 花になりたい

あだちりりー 著  
A5判並製本 総48頁 990円（税込）

街角の風、草木、花ばな、季節の移ろい、小動物、昆虫、逝きし人、過ぎ去った人。そのどれも、やさしく、いとおしく描き出す。いつも生命の底にある「わたし」を影絵のように見つめる眼がある。（近江詩人会代表・水沢郁）

## 琵琶湖博物館ブックレット18 トンボと企業と生物多様性

生物多様性びわ湖ネットワーク 編  
A5判並製本 総128頁 1980円（税込）

外来種が侵入しにくい企業の敷地内には、希少なトンボが数多く生息している。敷地内の生息調査と環境整備、県内のトンボ調査など、県内に事業所を置く企業メンバーによる活動を紹介。



## 表紙写真 左より、野村宗、松宮外次郎、吉田悦蔵

**編集後記** トークセッションでお話いただいた野村宗一さんの祖父、宗さんが満州総代理店を経営した星製菓に関する余談をひとつ。自社の特約店で配る機関紙を発行しようと考えた星一社長に印刷部の主任を任された森澤信夫と会社の技術者だった石井茂吉が、英文写真植字機を参考に発明したのが邦文写真植字機。1960年代のオフセット印刷の普及とともに、「活字」に代わって「写植」が1990年代半ばまで書籍や雑誌の文字の主流となりました。⊕



## おうみ 淡海文庫77 豊臣秀長の真相 関白の弟から見た天下統一

太田浩司 著  
B6判並製本 総216頁 1650円（税込）

天下人・豊臣秀吉の弟は、いかなる人物であったか？ 小堀正次・藤堂高虎といった近江出身の秀長家臣にも注目し、天下統一の経過を探る。

## えんざい 本能寺の変 明智光秀冤罪説

本能寺姉弟（三寺絵梨子・池田修平）著  
四六判並製本 総328頁 1980円（税込）

光秀はやっていない！ その六つの証拠とは？ 真犯人は誰か？ 事件前後の史料から明智光秀と真犯人の行動を徹底的に追ひ、光秀の無罪を立証する試み。気鋭の研究者姉弟がこれまでの謎を解き明かす。



## 自費出版年鑑2025

NPO 法人日本自費出版ネットワーク 企画  
B5判並製本 総144頁 2420円（税込）

日本で唯一の自費出版に関する年鑑。第28回日本自費出版文化賞の受賞作品16点の内容や受賞者のことば、選考理由などを紹介し、全応募作品805点の書誌情報を網羅。第29回募集要項付き。

## びわ湖を歩く びわ湖と考える 滋賀まるごとフィールドガイド

滋賀県立大学環境科学部記念出版委員会 編  
A5判並製本 総304頁 3520円（税込）

開学から30年を経て、環境科学部のさらなる挑戦に向けて、現役・元教員や卒業生が寄稿。琵琶湖とそのまわりをより身近に感じ、新たな発見につながるヒントが見つかる一冊。



### アンケートのお願い

Duet をより良い情報誌にしていけるために、ぜひ皆さまの率直なご意見・ご感想をお聞かせください。



インターネットで Duet がお楽しみいただけます

<https://www.sunrise-pub.co.jp/about/duet/>